



Title	社会へのまなざし
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学ニューズレター. 1997, 1, p. 43-59
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会へのまなざし

中岡成文

産経新聞の大阪本社版の夕刊に思想的なエッセイを連載してきました。「現在（いま）の考察」というコラムです。毎回別のテーマ（たとえば「希望」とか「癒し」のような）が与えられ、森岡正博氏、篠原資明氏と三人交替で執筆したので、三週間に一度（金曜日）読者の目にふれたことになります。九五年十月から始まり、九七年三月まで続けました。

三週間に一度の短文とはいえ、新聞連載を書かねばならぬプレッシャーはかなりのもので、毎日載せている小説家の方々の苦勞が少しはわかりました。また、掲載に先立って、産経新聞文化部の担当者に内容上、文体上のチェックを受けるわけですが、これがたいへん勉強になりました。専門の論文を書いているときは違った神経の使い方をしなければならないのです。河村直哉記者にお礼を申し上げたいと思います。

ともあれ、これらの拙文のなかには、「臨床哲学」的な題材を扱ったものもいくつかありますので、ここに再録して、ご参考に供したいと思います。最終的に新聞紙上に現れたものとは、字句が少し違う場合があることをお断りしておきます。各文章の最初（アラビア数字のあと）に記してあるのが、その回のテーマと掲載年月日です。各文章のあとには、今回読み返して気づいたコメントを付しておきましたが、これはもちろん新聞掲載時にはありませんでした。

1. 癒し（97年1月10日）

勤めている大学で、「心の哲学とケアの倫理」という授業を始めた。「ケア」という題目にひかれて受講する、看護学専攻の学生たちが目立つ。それはそれでうれしいのだが、この授業でいちばん学んでほしいのは、ケアとは看護や介護の仕事に限ったことではなく、私たち一人一人に関係があるということなのだ。

ケアとは、「世話をする」ことであると同時に、いやそれ以前に、「気にす

る」ことである。私たちは日頃、いろいろなことを気にしている。快適な生活をしたい。人に好かれたい。それは欲求と言い換えてもいい。とにかく人間はみな、いつもこの意味で「ケア」している存在だ。そして、ケアは、互いの交流の中にあってはじめて成立する。ひとが痛みを訴えるのも、それに対して適切な世話をしてもらえると期待しているからだ。気にするケアと、その世話をするケア。私たちの日常生活は、たえずケアし、ケアされるところに成り立っている。

ところが、ケアのやりとりには行き違いが生じやすい。病気やけがの治療にしても、ただ生理的な原因を科学技術を使って除去するだけでは、すまないはずだ。痛みを訴える患者さんが何をほんとうに気にしているか、その心ごとすくいとることができてこそ、その人を癒すことも可能になる。気にするケアと世話をするケアとのコミュニケーションがうまくいかないと、それ自体がわかまりとして残り、心の傷に変わって、癒しを必要とすることになる。人間の心理の複雑なところだ。

情報もストレスも過剰な社会では、気持ちがささくれだちやすく、そのぶん「癒し」や「ヒーリング」を求める声が目立つ。はじめにふれた「心の哲学とケアの倫理」という授業も、予定では「癒し」ということばを題目に入れるはずだった。それが変更になったのは、「癒し」がひとつの流行になり、各種のセラピーが乱立して、あやしげなイメージさえ伴うようになったせいだ。もっとはっきりいえば、「癒し」は非科学的な印象を与えるとして、これを嫌う大学人が少なくない。科学者たるもの、このような非合理的な、迷信くさい傾向に迎合すべきではないし、まして大学の教育には取り入れたくないというのだ。

たしかに、痛みやつらさの表現自体が、残念ながらゆがんでいる可能性はある。さきほどの言葉でいえば、「気にするケア」のありかたが偏っていて、すなおに「世話をするケア」の対応をとりにくいケースはある。たとえば、試験や文化祭を中止しないと自殺するという脅しが、昨年、各地の学校に相次いで寄せられた。このような形で救いを求める心情が、どれほどせつまつまったものであれ、「命にはかけがえがない」という認識を逆手にとって他人を振り回すやり方は、病んだ自己主張であり、結果として陰惨な暴力に化している。

こういった自己主張に、ディレンマに陥ることなく対応するのはむずかしい。

要求を受け入れれば、自殺者を出して、学校の評判が落ちるのを恐れる、事なかれ主義と批判される。逆に「甘えるな」と突き放せば、冷酷だとなじられる。これは少し極端な例かもしれないが、現代人の複雑に入り組んだ欲求と不安を反映しているのは、間違いない。それに応答し、癒しに導くためには、相手自身の心のもつれに共にからめとられることのない強さと、しかも相手を理解しようとする善意とが、大量に必要なってくる。

癒しには、一般的な心得はあるにしても、決まった「方法論」はない。「気にするケア」と「世話をするケア」との息の長いキャッチボールをていねいに続け、そこから「こつ」をつかんでいくしかないのだろう。その意味では、癒しの「科学」は、たしかに成立しにくいと思われる。だからといって、癒しについての教育が大学になくてもいいだろうか。むしろ、人間と社会の現場により敏感で、柔軟な取り組みは、これからの高等教育にも必要ではないだろうか。

専門家として「基礎」研究をするのではなく、自分自身も当事者のひとりとして、広い意味でのケアや癒しに従事する。文化系でも、そのような目的をもった「臨床」の学問が登場してきた。臨床心理学、臨床教育学などがそれだ。「臨床哲学」というものがあったらいいと、なかまで話し合っているところだ。

*コメント

「心の哲学とケアの倫理」は大阪大学共通教育の授業として、平成八年度から開講しました。八年度には、大阪大学内部からは柏木哲夫、大村英昭、倉光修、鷺田清一、入江幸男の諸先生と私、外部からは加藤尚武、野田正彰、川本隆史、越智貢、池川清子、森田敏照の諸先生に出講していただきました。九年度は少し顔ぶれに変化がある予定です。

「ケア」が人間存在に深く根ざしたものであることについては、最近、よくいわれています。ディープ・ケアリング (deep caring) を提唱する人もいます。

2. 信頼 (96年11月15日)

私は、赤信号でも、自分の判断で横断歩道をわたることがある。もちろん、右を見ても、左を見ても、車の影も形もないときだ。けれども、小学生の子どもを連れているときには、こういう融通のきかせかたはできない。信号は守ら

なければいけない、これは「決まり」だと、子どもは教わっている。そう、たしかに決まりは守らなければならないよ。でもね——と言いかけて、子どもの純真な目を見返すことができず、やはり待つことにする。信号が変わるのを。

いったい、このジレンマは何なのだろう。一方では、子どもを連れていようといまいと、車のにおいがしようとしまいと、ともかく信号が青になるまでは、百年でも待つという主義の人もあるだろう。他方では、道はつねに自分のリスクで横断すればいい、信号の色は無関係だという考えの人もあるらしい。ヨーロッパのある国では、無邪気に赤信号で立ち止まっている歩行者などひとりもない、という。いったいどちらが正しいのか。それともどちらも極端で、状況に応じて態度を使い分けるべきなのか。

私はけっこう悩んでしまうのだが、ここでの問題はそれではない。子どもの前では、ふだんどおりの自分を無造作に出せないこと、子どもの目には人を反省させる力があるということを、考えてみたいのだ。

いまさというまでもなく、親子というのは不思議な関係だ。子どもは親を選べない。たまたまこの世に生を受けたとき、目の前にいるのが親なのだ。「すり込み」という現象があるらしい。鳥などが、卵からかえったあとすぐに見たものを、自分の親だと認識する。飼い主を自分の親だと思うことだってあるのだろう。ほほえましいような、しかし鳥にとっては必死の行為なのだ。たまたま目の前にいた存在に自分の運命を託すなんて、これほどむちゃなことはない。しかし、その捨て身の信頼が相手をしばる。鳥でそうなら、人間ではましてそうだ。

さて、それで信号の話にもどる。他の人はどうだか知らないが、私が子連れでひたすら青信号を待つのは、子どもの「信頼」が重くのしかかっているからだ。私一人なら、赤信号でわたることもある。それは私だけのリスクだ。しかし、まだ判断力の若い子どもが、それを見て、私のまねをしたらどうなるだろうか。のみならず、交通規則には必ずしも従わなくてもいいのだと、拡張解釈したらどうなるのか。そう思うと、私の足は信号のところで根をはやしてしまう。つまり、子どもの「お手本」となっていることがプレッシャーとして働き、私の選択肢を狭める。信頼されるというのは、かなりしんどいことだ。

だけどねえ、と反論されるかもしれない。規則や決まりを墨守することを教

えるだけが、親の責任じゃないでしょう。過保護では、自立心が育ちませんよ。むしろ、その規則や決まりが何のためにあるのかを自分で判断させ、「応用力」を身につけさせることが、ほんとうの務めだと思うな。信頼の名のもとで、親子が拘束しあうなんて、息苦しいだけです。子どもはいやおうなしに変わっていくんだから、親も変わらなきゃ。それでも続くのが、本当の信頼関係ってものでしょう。

そのとおりなのかもしれない。そこで思い出すのだが、「信じる」にあたる英語の動詞「ビリーブ」に、次のような使い分けがあるらしい。ただ「アイ・ビリーブ・ユー」といえば、「あなたのいうその言葉を信用します」という意味にすぎない。相手の人格そのものに信をおくときは、「アイ・ビリーブ・イン・ユー」と「イン」を入れる。こう習った記憶がある。

複雑な社会ほど、人は変化に慣れなければならない。たとえば政治家に対して、その時々言動には納得（「ビリーブ」）しても、相手の人格そのものを一貫して信頼し、ついていく（「ビリーブ・イン」）のはむずかしくなっている。かつて、「だめなものはだめ」と言い切って喝采を浴びた野党の党首がいた。その人物も、連立政権後に党首に返り咲くと、歯切れが悪くなった。流動的な政治状況ゆえと、理解はできる。しかし、ひとが最終的に信頼するのは、やはり、動かぬもの、変わらぬものだと思う。

親と子。政治家と国民。複雑な社会とはいえ、信頼は単純でありたい。

*コメント

原則を守ることと「融通」を利かせることとの〈はざま〉。個人的にも悩むことがありますし、それこそまた個別の事例をたいせつにする臨床哲学の出番かもしれません。

ここで述べたような親子の関係の捉え方には反対もあるでしょう。いずれにせよ、子どもと歩みをともにするなかで、たくさんのかたちを教えられてきました。その中間総括の一部として、うえのように述べてみたわけです。子どもとともに、親も成長するものです。それは私自身の両親を見ていて気づいたことでもあります。このような関係は、人間関係のなかでまったく特殊なものなのでしょうか。引き続き考えてみたいと思っています。

他方、政治という大きなシステムと個人との関係については、社会システム

論の観点から考察する必要があります。これについては、私も編者の一人となった、佐藤康邦他編『システムと共同性』（昭和堂）を参照していただければ幸いです。〈ソクラテス的対話〉をひとつの理念とする臨床哲学が、マクロな政治・社会状況と取り組む既成のグランド・セオリーたちと、どのようにかわっていけるかも、検討していかなければならない課題でしょう。

3. 再生（96年12月13日）

今年の紅葉はいつにもまして、美しく色鮮やかだったという印象がある。その名残をまだわずかにとどめる遠くの山々に向かって、深呼吸をする。かなたの山の靈気に、こちらまで心が洗われるように感じる。

そういえば、ヒマラヤ山脈のふもとで障害児の教育に打ち込んでいる、日本人神父の話聞いたことがあるだろうか。ネパールのポカラという街に住む、大木章次郎さんだ。大木神父を支援する「ポカラの会」が発行した記録、『ヒマラヤの麓より』を読んだ。

大木さんは、長く日本の学校で倫理を教えていたが、一九七七年に単身ネパールにわたった。五十一才だった。首都カトマンズの学校から舞い込んできた求人の広告に、応じたのだ。ふだんから発展途上国の人々のために働く心構えを、生徒に説いていた自分。その自分がこの機会にチャレンジしなければ、自分の授業はただの空念仏だったことになる。一晚考えて、「仕方なしに」ネパール行きを申し出たという。私はこのさりとした述懐が好きだ。「一晚」というのは言葉のあやではなく、「仕方なく」というのも本音だったと思う。しかし、そこから後の行動力がすごい。

カトマンズで二年間働いたあと、障害児の学校を作るため、ポカラに移る。ネパール社会からいっさいの公的援助はなく、逆に根強い身分制度などに妨げられながら、ほとんど独力で学校を起し、手作りの教育を進めていく。健康を害するまでに食費を切りつめ、学校の運営にあてる。『ヒマラヤの麓より』を読んでいくと、大木さんの不屈の姿勢に肅然とならざるをえない。

聖職者なのだから、りっぱなことができて当然と思うなら、それは見当外れだ。神父も人の子、たしかに妻子は持たないが、しがらみは世間並みにあるはずだ。大木さんがしがらみを断てたのは、「再生」への強い意志のおかげだっ

た。

というのも、大木章次郎は、太平洋戦争末期に海軍予備学生となり、あの人間魚雷「回天」に乗ることが決まっていた。ところが、その日を前に終戦。目前の確実な死から生への転換。大木さんは神父となり、教職に身を投じた。かれの第一の「再生」といいいいだろう。教師としての穏やかな日々も、もちろん実り多いものだったに違いないが、かれはどこか満ち足りなさをおぼえていた。そこに届いたネパールからの便りに、第二の再生を賭ける決心をした。骨身を削る苦勞を二十年近く重ねたいま、「いつも、心からの幸せを満喫している」と、完全燃焼の充実感を語っている。

この大木神父の記録は、神父の友人で元同僚の倉光誠一さんが、「ポカラの会」の代表としてまとめた。けっして自分から窮状を訴えたり、援助を求めたりしない神父のために、倉光さんはスポークスマンとなり、資金を届け、自分でもなんどもネパールに足を運んで、活動を支えた。この方にも、敗戦をはじめ、いくどかの「再生」の体験があったらしい。そしていま、飽食の日本に住む自分に危機感をおぼえ、旧友とともにネパールの地で、新たな再生の夢を紡ぎだそうとしている。さらに、その倉光さんの姿が、いまの日本の社会にも、自分自身にも満足できない、多くの乾いた魂の持ち主を引きつけ、「ポカラの会」は静かに広がっているらしい。

『ヒマラヤの麓より』には、政治・宗教がらみの重い話もあるが、ほっとするような小さなエピソードも欠けていない。たとえば、大木神父は、ミサに使うワインを自分で作っている。干しぶどうを水につけ、ある錠剤を入れると、うまく発酵してワインができるのだという。絞り粕は、煮てジャムにする。自家製のつつましいワイン。かたや、世界各国から高級なワインが集まってくる日本。それ自体は悪いことではない。だが、文化のバブルに巻き込まれたままでは、魂のぜい肉は取れない。

終わりに、ひとつ告白しておきたい。大木さん、倉光さんと呼んできたが、お二人とも、じつは私の学校時代の先生なのだ。卒業後ずっとごぶさたしている間に、このような活動を始められたことは、風の便りでしか知らなかった。その間、私自身は何をしていたことか。旧師たちの老いることのない情熱に、いままた教えられた。

*コメント

私は広島市にあるイエズス会経営の中高等学校に通いました。カトリックの信仰とのかかわりについて、ここでは詳しいことは省きますが、自分の、そして他人の魂のありようをじっと見つめることについては、しっかりと教え込まれたように思います。

もうひとつ、先の個所（2. 信頼）で「親も成長する」と記しましたが、かつての恩師、こわいばかり、あるいはやさしいばかりだと思っていた先生たちも、成長するんですね。もちろん、好ましくない方向で変わっていく人も、あるいはいるでしょう。そのようなマイナスの変化も含めて、いま現在相手がおかれている状況を敏感に察知して、関係を作っていくこと、「この人はこういう人だ」という固定観念にとどまらないこと、それが臨床哲学の心構えとして要請されているのではないのでしょうか。

4. 暴力（96年10月25日）

アメリカ映画を観ていると、カー・チェイスとか殴り合いとかが延々と続く場面によく出くわす。好きな人にはこたえられない迫力なのだろうが、私は白けてしまう。過激なバイオレンス映画にもついていけない。流血や死、破壊のシーンに必然性がないからだ。それでも、ある種の解放感は伝わる。

暴力は、現代のキーワードとっていいだろう。ただし、公的世界からは抹殺され、裏返ったキーワードだ。表の社会では、「やさしさ」、「思いやり」、「愛」といった口当たりのよい決まり文句が、幅を利かせている。そういう偽善を憎む若者は、映画やコミックの荒々しいエンターテインメントに走り、ニヒルな英雄と自分を同一視する。しかし、気概と力の伴わない、戦わない愛が自己実現しえないように、自制と内省を伴わないパワーの爆発は、たんに動物的で、自滅する。私たちの表と裏とは、奥深くで通じ合っている。ただ「暴力はいけない」というだけではなく、広い意味での暴力について、もういちど考えなおしてみる必要がある。

狭い意味での暴力とは、物理的にひとを強制することを意味する。身体に苦痛を与えることも多い。ところが、「ことばの暴力」は、身体でなく、心に「痛み」を感じさせる。いじめやセクハラの場合にも、心理的なダメージが大き

いようだ。暴力とは、ひとを萎縮させ、さまざまな形で傷つけることだといえよう。

ここでむずかしいのは、何をもって「傷つける」とするかだ。私の印象では、政治やマスコミなど表の世界では、「傷つけない」ための対人マニュアルのようなものができているが、それでいいのだろうか。不快な思いをさせないことは、人付き合いの第一歩ではあるが、真の人間的接触のためにはもっと大事なこともある。

かなり前になるが、脳性小児マヒによる障害の残った人たちを日常的に介護するボランティアに加わって、驚いたことがある。介護グループの学生が、なじみの障害者の不自由な手足や言葉つきを、平気で話題にするのだ。もちろん、からかうわけではなく、会話の流れの中で、必要に応じて自然に触れるのだが、それでも冷やっとなることがなくもない。腹を立てた身障者が「差別や！」と叫びだした場面も、記憶している。相手の青年は、そうではないと反論し、それで場は収まったが、二つのことを学んだような気がした。

ひとつには、たまには「傷つける」リスクを冒してでも、相手の心に踏み込んで、本当のニーズをくみ取ることも必要だということ。もっとも、そのためには、相手とのふだんの信頼関係が大切で、しかもそれに甘えすぎてはいけないうだろう。ふたつめに、障害者の権利がまだまだ認められていない社会では、ハンディのある人々の心の負担はどうしても大きく、健常者の何気ない一言が、やはり「暴力」になる可能性をひめているということだ。心しなければならぬ。

少し後に、こんどは子育てで、貴重な経験をした。私は子どもに体罰を加えたことが何回もあり、「やりすぎた」と後悔したことも少なくない。それでも、子どものしつけが、理屈による説得だけで済むとは、私にはどうしても思えない。道徳的・社会的に絶対許されないことを、子どもに明確に教え込むためには、子どもがごく小さいうちは、ことばでは足りない。というより、たとえことばを使っても、子どもにわかるのは、その正確な内容よりも、親の真剣な語調と目つきではないだろうか。

体罰には、もちろんいろいろな問題があるだろう。子どもの人権を守るきちんとした一線は当然、必要だ。ただ、私がいいたいのは、ある時期には、親が

子をたとえ物理的にではなくても、「強制」しなければ、教育はなりたないし、じっさい誰でもそうしているということだ。それは親の愛だ。しかし、同時に、広い意味での暴力でもある。親とは、このリスクを自覚して、子どもの人格形成に参与する責任を、そして子どもの見返す目に答える責任を負っている。

敵味方のはっきりした活劇の世界では、暴力は明快である。それは、「暴力」が潜伏せざるをえない現実社会の代償といえる。透明な虚構でストレスを発散しつつ、私たちはこの不透明な光景を生きていくのだ。

*コメント

この文章でも、親子の関係を扱っています。〈家族〉の崩壊とか変容が最近、よく論じられ、しかも肯定的なニュアンスで口にされることも少なくありません。家父長的な権威の瓦解に快哉を叫ぶという気持ちはわからないでもありません。子どもと同じく、親もまた、ひとりの人間として可謬的な存在、つまりいつでも過ちを犯しうる存在です。しかも、自由主義の「自己決定」の原理に従えば、子どもに関することからはその子ども自身に決定をゆだねなければならないといえますから、親がしゃしゃりでるのは間違いだという結論になりかねません。

しかし、自己決定の原理は、判断力の成熟した個人に対して認められるものです。子どもでも、年齢により、また問題となっている事柄によれば、自己決定にゆだねてもいい、あるいはゆだねなければならない場合もあります。しかし、子どもが決定できない、あるいはあいまいにしか決定できない、あるいはまた大人の目から見て明らかに誤った決定をしようとしている場合も、あるいはです。そこで、親は介入しなければならない。自分の経験をもとに、子どもの個性や将来の可能性を考慮に入れながら、子どもを説得してそちらの決定をするよう導いたり、それどころか子どもに代わって決定を行ったりすることが必要でしょう。この責任を放棄することは許されないと思います。

ただし、この責任はあくまで子どもの幸福のために、また自分の可謬性をつねに視野に入れながら、果たされるべきです。ということは、子どもに教えられて、自分の考え方を改めることだってありうるわけです。

このように動いていく相互関係、かといってしかるべき時が来るまでは、完

全に対等とはいえない相互関係は、親子以外にもありそうです。それに「暴力」という性質を帰すのは、誤解を生む可能性が大ですが、しかしそこから眼を背けることはよくないと思います。

5. 不安（96年3月1日）

海外旅行をする人が増えているらしい。短期間でも異文化に接するよい機会だと思う。ただ気になるのは、異文化に触れるうえでのしんどさやリスクを避けて、楽なところだけつまみ食いしているケースが多くはないかということだ。

カルチャーショックという言葉があるように、本当の異文化体験というものは、境界（ボーダー）を越える苦痛や不安とは切り離せない。その文化に育った人なら巻き込まれないような誤解やトラブル。「よそ者」としてこちらを見る視線に常時さらされ、慣れない外国語に必死で耳をそばだてる緊張感。自分の存在自体が不安定になる、このような心細さをくぐり抜けてこそ、逆に日本で外国人として暮らしている人々の身になって考えることもできる。文化や言葉の違いはどうあれ、人間は人間だという発見も、その結果として生まれてくるだろう。

大震災やサリン事件で揺れた昨年、ある欧米人が、「日本人には治安に関する想像力が欠如している」とコメントしていたと記憶する。想像力という言葉あまりこんなふうに使いたくはないが、社会生活を脅かす危険な兆候に対し、私たちがこれまで比較的無自覚だったのは確かだろう。万一の事態を想定して、それにあらかじめ対処するのは、ますます複雑化する社会では不可欠の心得だ。その意味では、危機管理という発想にも慣れなければいけない。ただし、治安についての「想像力」が奇妙な方向に発展し、一人歩きすることは戒めたい。たとえば日本では、「ガイジン」というだけで、社会秩序の阻害要因として扱われる可能性がある。何しろ、関東大震災後の混乱で、多数の外国人が危険視され、虐殺されたという深刻な先例があるのだ。

国際化とか、ボーダーレス社会の到来とかいわれるわりには、「ガイジン」は無気味だ、危ないという観念は、今でも根強く残っているように思われる。一昨年のこと、徳島大学で留学生用の宿舎を建設しようとしたとき、予定地周辺の住民が計画の変更を要求した。自治会長は、「日本人なら信用できるが、

外国人は信用できない」と語ったという。外国人といっても十人十色で、日本に来る目的や文化的習慣、そしてもちろん各人の個性など、すべて違うはずである。それを無視して、「外国人は信用できない」とは、やはり短絡した見方といわざるをえない。「日本人なら信用できる」という部分も、都会人にはうつろに響く。

それでも、外国人を差別するこの発言は、境界（ボーダー）を目の当たりにした戸惑いを正直に表現している。当事者だけに感じ取れるこのリアリティは、遠くからきれいごとで国際交流の必要を唱えるだけでは打ち消せない。むしろ当事者のリアリティから出発することによって、より地に足の着いた異文化との相互理解が生じてくるかもしれない。

私は要するに、不安というものの遠近感と流動性に注目したいのだ。外国人そのものが危険なわけではなくとも、コミュニケーションの行き違いが予想せぬトラブルを生む可能性はある。利害関係のない人間やお役所にとっては、それは国際交流のために誰かが（誰かが！）引き受けるべき、一般的な「リスク」にすぎない。しかし、外国人と現実と接する当事者にとって、それは自分たちが手に汗して一つ一つクリアしなければならない、具体的な「危険」と感じられる。遠近感といったのはこういうことだ。

他方で、不安というものは、相手の実際の姿を知らないうちこそ、大きくふくれ上がる。境界（ボーダー）を越えて交渉を重ねるにつけ、不安は現実的な理解に変わり、それまでの自分たちになかったものが見えてくる。身近な「危険」は身近な自己変革の突破口につながっていく。不安の流動性といったのは、これだ。

ともかく、相手が人間の顔をしていれば、このような可能性も残されている。やりきれないのは、私たちを守るはずの制度やシステムが、逆に私たちの不安の訴えを冷たくはね返す壁となる場合である。住専処理に関する国民の不満よりも、金融システムの不安定を恐れると、政府高官は言い放った。飲み屋の政治談義で終わってしまう世論なら、なるほどこわくはあるまい。私たちの不安と不満が、未来を切り開く足腰の力に支えられているのかどうか、いま問われている。

*コメント

ひとの善意や好意をばかり見ていることができれば気は楽ですが、この社会にはそれとは反するもの、異質なものも含まれています。そのような要素にどう対処するかは、臨床哲学としても避けては通れない問題でしょう。

6. 生命（96年1月19日）

現に生きていることは確かでも、生きている証というものはなかなかつかみにくい。その証を一貫して植物に象徴してみせ、メッセージ性の強い漫画として私が注目していた「家裁の人」がこのほど完結した。主人公は家庭裁判所の判事だが、人を裁くことより、育てる方に関心があり、住んでいる街のどの片隅にどんな木や草が生えているか知っている、風変わりな人物だ。かれはさまざまな花や実や種のたたずまいを通して、裁判所に来る人の生き方を理解したり、暮らしを変えるよう迫ったりする。最終回の「登場植物」はカーネーションとジュズダマだった。

この漫画のすぐれたところは、たとえそれが「弱者」の肩を持つことであれ、定型化した見方では割り切らずに、人間の生命の複雑さと矛盾を大切に描いている点だ。主人公も、そして作者自身も、自分を安全なところにおかず、問題の渦に飛び込んでいく。

最後に扱われたエピソードは、ある中学校で起きた体罰事件である。被害者の「不良」少年、加害者の教師たち、学校管理者、教育委員会など、関係者すべての目線と主張がていねいに浮き彫りにされる。後日談では、就職し、自立した少年が学校を訪れ、かつて自分に暴力を振るった教師の手を取って、「ありがとう」と感謝する。おそらくこの場面に対して、体罰を容認するつもりかと読者から抗議が出るだろう。しかし、「体罰はいけない」と原則論を口にすることで、荒唐した教育の問題は片づくのだろうか。むしろ、ジュズダマのような固い殻をかぶって、周囲のすべての人々から孤立していた少年が、母に照れながらカーネーションを手渡す——「家裁の人」はそこに生命の好転の証を見るのだ。

現代社会は政治・経済・文化の複雑なシステムで動いている部分が多く、個人の心理や生きざまからさまざまな事件を理解するには、限界があるだろう。けれども、システムを支えるのも、システムに翻弄されるのも、人間にほかな

らない。ひとつひとつの生命の喜怒哀楽を他人が代わって生きることはできない。昨秋の少女暴行事件以来高まっている沖縄の人々の怒りに、このような観点から少しでも近づくことはできないだろうか。

沖縄のいらだちは、基地と共存しなければならない苦しみを、「本土」の人々が沖縄に押しつけたまま、その苦しみを理解しようとしにくいことに向けられているという。私も「本土」の人間だが、経験の共有という点では、ひとつのチャンスがある。広島から程遠からぬ米軍基地の街が、私の出身地だからである。

戦闘機の発進に伴う鋭い衝撃波に我が家の窓ガラスがふるえたこと。肩で風を切って歩く米兵の姿をよく見かけたこと。小学校の同級生に黒人との混血の女の子がいて、思い出すと恥ずかしいが、当然のようにその子をいじめる生徒の中に、私もはいていたこと。返還前には、「沖縄を返せ」と叫ぶデモの団がときおり通りを練り歩いて、基地の方に向かったこと。あれこれ思い出しはする。しかし、私の街では、米軍基地に対する住民の感情は全体としては穏やかで、「沖縄の怒り」に比すべきものはない。同じく基地をかかえていても、状況が違うのだろう。

そういうわけで、沖縄の魂のたかぶりを自分のこととして理解することはやはりできないと、私は告白する。けれども、まったく同じ立場ではなくても、生命とシステムとのあつれきからくる痛みを思いやる、想像力や理性を私たちはもっているはずだ。このたびの事件で、少女の生命と尊厳は大きく傷つけられた。前の米太平洋軍司令官は、暴行のためにレンタカーを借りる金で、女性を買うこともできたのにと発言した。

性欲をうまくコントロールできない兵士たちに対する、軍事システム責任者の舌打ちが聞こえる。辞任したこの司令官の心の中に、辱められた少女と沖縄とに対する真の謝罪は見いだせない。それと同じ無感動・無神経が日本の政治システムにも浸透しているようだ。

たしかに、生命の尊厳という観点に立っても、問題が具体的に解決できるわけではない。さまざまなシステムによって私たちの生命が保護されているという側面も、忘れてはなるまい。生命を危うくするのも、また生命なのだ。しかし、私たちがシステムに慣れて、生命のしなやかさを見失ってしまったとき、

文明の凋落は速いだろう。

*コメント

ここに書いたとおり、私は山口県岩国市の出身です。岩国は、年輩の人には五重の太鼓橋である「錦帯橋」で知られていますが、この頃は米軍基地の方が有名でしょう。以前帰省したとき、JRの中で、身重の妻と二人の幼い子供、おまけに山のような荷物をかかえて、新しく岩国の基地に赴任するらしい若い米兵に会いました。下車するとき、荷物を下ろすのを手伝うと、愛想よく「サンキュー・サー」とこちらに礼を述べてくれました。日本人との接し方にかなり気を使っている様子でした。沖縄の少女暴行事件の直後だからかなと、私は考えたものです。

7. 幸福（95年12月22日）

一月の震災で痛めつけられた西宮の一角を、週に一回通り過ぎる。前は青いシートが掛けられて静まり返っていた家々の多くで、槌音が響いている。惨事の爪痕をあちこちに残しながらも、ひとまずは復興への着実な歩みを感じとれ、ほっとした気分になる。

それにつけても、ボランティアの一時期の熱気はどこへ行ったのだろうか。震災のために多数の生命や家財が失われ、一家が離ればなれになったケースも少なくない。これほど巨大な不幸の出現に被災者たちが打ちひしがれたのは当然であるが、他面でその不幸は、日常は隠されているかに見えた生活のエネルギーや知恵を刺激し、引き出したようにも思われる。ボランティアに従事した人にとってはとりわけ、「生きることにはっきりした輪郭が与えられた」という思いは、強かったのではあるまいか。

災害の心理学には、ディザスター・パラダイスという言葉がある。災害の与える衝撃の中で、通常の世界関係が断たれ、非日常的な、一種の充足感のある状態が実現することをいう。パラダイスという逆説的な言葉が適切かどうかはおいておこう。ともかく、災害の強烈なインパクトを経験してしまうと、それ以前の生活が幸福というよりは、何かしんの通っていないあいまいな状態、いわばたんなる「不幸の不在」として見えてくる場合はあるだろう。とくに、この国の「震災以前」は、泡のように実体のないバブル経済の印象が強かった。

震災の記憶が全般的には薄れつつあるいま、私たちはこのままでは「不幸の不在」に逆戻りしかねない。せっかくボランティアをはじめとする社会参加の動きが目立ってきたこの年を、過去の一ページにしてしまわないためには、私たちそれぞれの重みを加えた「幸福の形」をしっかりと描くことがポイントになるのではないだろうか。

いま、「私たちそれぞれの重みを加えた」といった。一方でいえば、幸福とは他人に決めてもらうものでなく、自分で発見するものだから、こうすれば幸福になれるという一般的な方法論は存在しないはずだ。たとえ他人には理解できない個人的な趣味であれ、それがひとときの充足感をもたらしてくれるのなら、「小さな幸福」はかけがえのないものだろう。たとえば私はコミックスを読むのが好きだ。それもたあいのないラブコメやギャグ漫画、スポーツものが中心で、けっして人に誇れる趣味とはいえないのだが、このささやかな忘我の機会を手放す気はない。

しかし他方では、極端に孤立し、社会性や連帯に背を向けた幸福感は、長続きしないことも確かだろう。周囲に迷惑を掛けないという配慮に加えて、その小さな幸福を可能にする社会全体の仕組みや状況に関心を持ち、いわば大きな幸福の担い手となること。それで思い出すのだが、古代のギリシアには、「よく統治された国家に生まれ合わせることが、何よりの幸せだ」という思想があったという。私はべつに、天下国家を論じなければ幸福になる資格がないといっているわけではない。ただ、いったん趨勢が定まってしまう個人には容易に左右できない、政治・社会的次元の大きな流れがあることを私たちは知り、これに対処しなければならないだろう。

「運命」という言葉は今では少し古びて聞こえる。それはせいぜい、男女を結ぶ赤い糸という連想くらいしか呼び起こさないかもしれない。しかし、半世紀ほど前には、この国で、戦争という名の、すべての人々を呑み込む大きな運命が荒れ狂ったことを誰もが知っている。そしてそれは現在、地球の他の多くの地域を覆っている。

戦没学生の遺書・遺稿集として有名な『きけ わだつみのこえ』の改訂新版が刊行された。新版の特徴は、従来の版では削除されていた軍国主義的な箇所が復元されたことだ。たしかに、「忠と孝とが一致するのが日本なのだから、

先立つ不幸を許して下さい」という死者の声は、戦争遂行のイデオロギーをそのまま反映しており、それを忠実に伝えることをためらった従来の事情は理解できる。しかし、どのような運命の縁取りの中でも、人はそれぞれの哀歎を抱いて生き死にする。私たちはそのありさまを直視したうえで、自分たちがより無残な軌跡を描いていないかどうかを省みなければならない。

*コメント

ここでは本格的なボランティア論は提示していませんし、今のところ提示する用意もないのですが、ボランティアを型にはめる必要はないというのが、私の基本的な意見です。「よし、やるか」というのりを、まず大切にしたい。ただし、「のり」といっても、気が変わったらあっさりやめてよいということにはなりません。ある種のスタビリティ（安定さ）は不可欠でしょう。ただ、それを頻度や仕方の点で固定して、自分や関係者を縛るのはふさわしくない、ということです。

産経新聞のコラム「現在（いま）の考察」に掲載された拙文は以上7編で代表させることにします。参考までに、これ以外のテーマが何だったかを掲載順にあげておきます。95年には、希望、ことば、自然、96年になって、自由、国家、子ども、歴史（このときは天皇や従軍慰安婦に触れたので、一部読者に猛烈な抗議を受けました）、ゲーム、性、死、愛、憂い、情報、公共性、97年に入って、いきづまり、コピー、そして最後が終末（の予定）です。